

金武古墳群現地説明会資料

2013年7月27日(土)
福岡市経済観光文化局
文化財部埋蔵文化財調査課

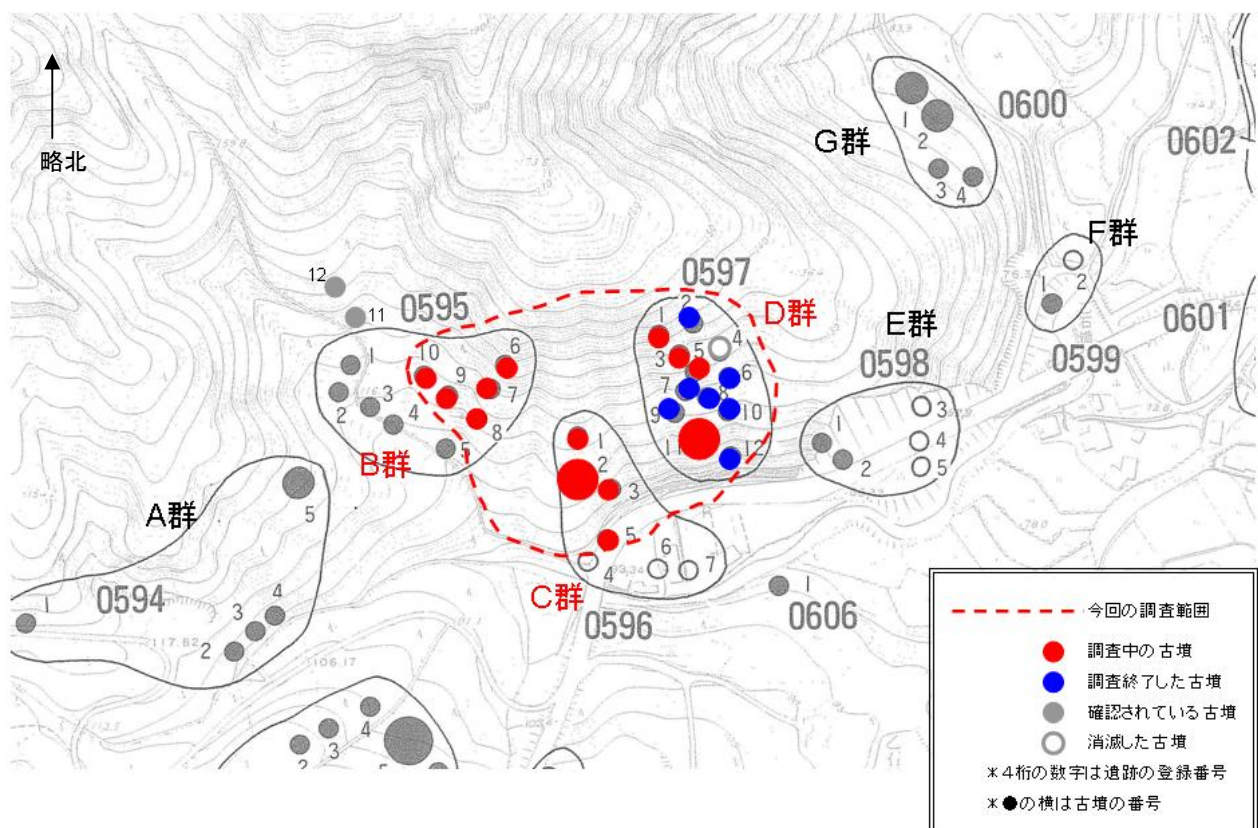
早良平野を取りまく丘陵には、約700基(*)以上の古墳時代後期の群集墳と呼ばれる古墳群が分布しています。平野の北西海岸から、ひろいし 広石古墳群、はねど 羽根戸古墳群、いもり 飯盛古墳群、そしてかなたけ 金武古墳群へとつながっています。金武古墳群はひなた 日向峠に沿って流れる日向川周辺の山の麓に位置しており、約150基の古墳からなりたっています。この古墳群には、市指定史跡となっているめおとづか 夫婦塚古墳や市内では珍しい装飾古墳も含まれています。また、朝鮮半島で焼かれた新羅土器が出土していることも注目されます。

* 古墳は、1基、2基と数えます。



金武古墳群遠景

現在行なっている8次調査は、開発に伴う発掘調査で、吉武B、C、D群の内20基の古墳を対象に昨年7月から着手しています。古墳は標高 100～140mと高く急な南側斜面に造られています。弥生時代からつづく重要な交通路であった日向峠を行き交う人々からのながめを意識して造られたのかもしれませんが。古墳の入口は、造られてからまもなく盗掘によって開けられていたようで、^{ふくそうひん}副葬品の多くは持ち去られていました。また、石材を利用するため、天井部の大石も2基を残して抜き取られていました。主な出土遺物は、床の石のすきまに残っていた土器や鉄製品の破片、^{じかん みみかざ}金張りの耳環（耳飾り）、メノウやヒスイ製の^{まがたま}勾玉、水晶の切子玉、ガラス小玉などの装飾品のほか、鉄をつくる時にできる^{てっさい}鉄滓も見つかりました。これら 20 基の古墳が造られた時代は、海外の先進文化を積極的に取り入れようと遣隋使や第1次遣唐使が派遣された6世紀の末から7世紀の前半ごろです。



今回の調査範囲と位置図

古墳の各部分の名称



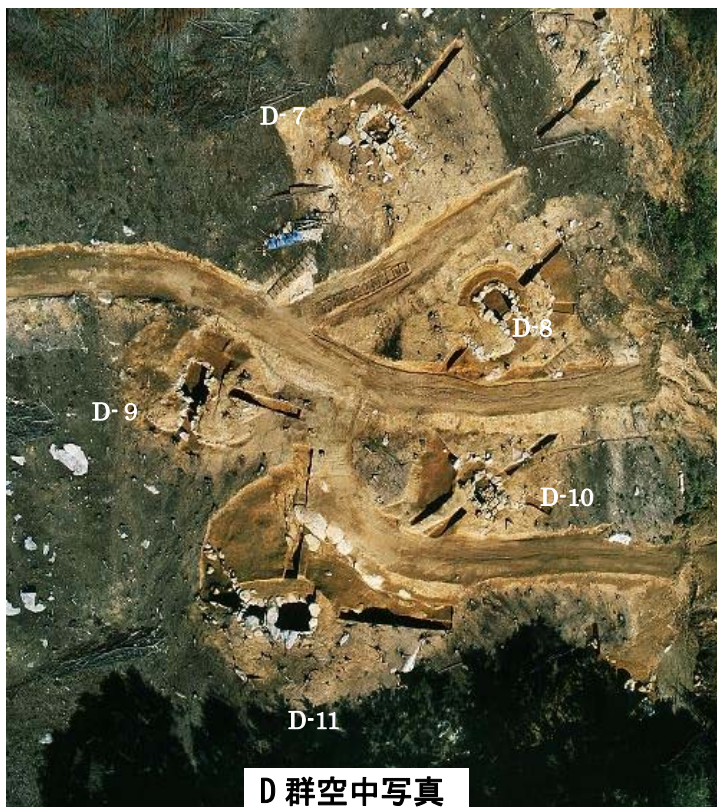
玄室（げんしつ）：遺体や副葬品をおさめる部屋。

閉塞石（へいそくせき）：入口をふさぐための石。

羨道（せんどう）：玄室に向かうための通路。

前庭部（ぜんていぶ）：羨道の前にある広場。ここで
お祀りなどをする例もあります。

* 左の図は、古墳を上から見た図です。



D 群空中写真



D-9 号墳



D-10 号墳

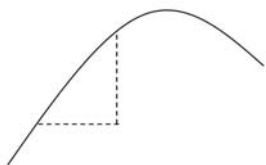


D-12 号墳

☆古墳の造り方☆

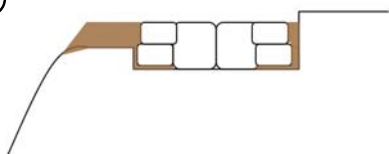
(金武古墳群の場合)

①



①まず、山の斜面を削り取って、古墳を造る平坦な面を造り出します。

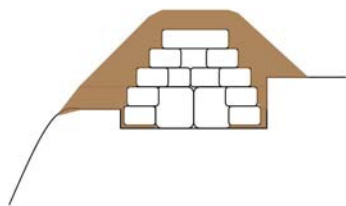
②



②次に、基礎になる部分を掘り込みます。そこへ石室の壁になる石を積んで、周りに土を盛っていきます。

* 金武古墳群では、自然の石を加工せずにそのまま使っています。

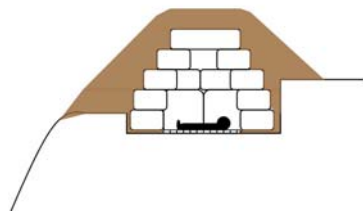
③



③これをくり返して、天井の石をのせ、古墳の墳丘の形をつくります。

* 金武古墳群の壁や天井に使われている石は、古墳がある山から取ってきたものです。

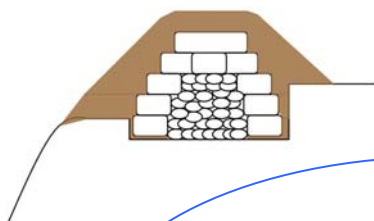
④



④石室の床に石を敷きます。それから、死者とともに副葬品をおさめます。

* 床に石を敷きつめない場合もあります。また、石室の床に敷きつめてある石は、室見川から取ってきた河原の石と見られるものもあります。

⑤



⑤入口を石などでふさぎます。

* 入口をふさいだ石をどけることで、追加で埋葬することができます。

古墳の壁や天井に使われている石は、1人ではとても持ち上げられない大きなものばかりです。そんな大きな石を運び、組み立てるには大変な労力が必要だったと考えられます。



市内の詳しい文化財情報を探すなら

福岡市の文化財

検索 クリック!!

<http://bunkazai.city.fukuoka.lg.jp/>